

ニ勝ル故ニ大難色マサル、彼ハ迹門ノ一念三千、此ハ本門ノ一念三千ナリ、天地遙ニ異ル也」

と、以て、台當兩家の異目、勝劣等を知るべきである、されば、理性を以て實とし、事相を以て、權となし、全性起修を附會して、強いて十界互具を説かんとする台家の哲學は、竟に、當家事觀の簡明直截にして、而も、能く事理の奥底を論盡せるに及ばざる事、甚だ遠いのである。

以上、略して台當兩家の哲學的方面に就て、之を批論せしと雖も、吾人は、唯、理の徹底せる事のみ満足を抱くものではないのである。

然らば、其目的、即ち、實際的方面救済としての宗教の眞價、果して如何か、吾人は更に之に就いて論述せんとはすれ、紙數の許さざる所、随つて、次回に於いて之を論ぜんとするものである、幸ひに之を諒せよ。

(昭和五年仲秋 伊豆 錦玉精舎にて)

生活戦線と宗教問題

津 田 歡 貞

最近の世相を展望するに、「大東京失業者四十萬を突破す、全國失業者無慮百萬に及ばんとす云々」

「産兒制限、墮胎遺棄、幼兒殺し云々」。「農村疲弊、生繭大暴落云々」。「大商店大工場閉店、閉鎖云々」。「小學校教員整理減俸斷行さる云々」。斯うした問題は、毎日の新聞紙上や月刊雜誌を賑はして行くのである。何が現代社會を斯くさせたか？

政治も、經濟も、思想も、悉く行詰つた。そして社會生活の上に異狀を來すやうになつたのは何故か。私達宗教家は是等の問題、是等の原因を殿堂伽藍の奥深く鎮座まじ／＼て語らうともせず、探らうともせず只だ杳然として眺めて居ればいいのか知ら「世の中の不景氣は坊主風情の知つたことではない。俺達はお經さへ讀んでゐれば現世安穩、後生善處ぢや」如何にも悟つたらしくこんな優さしいお口を叩く坊さんの大多數は一体何んのために出家得道して「今身より佛身に至るまでよく持ち奉る本門の本尊、本門の戒壇」なんてお誓ひ遊ばしたんだらう。

若しも宗教家が毎朝毎夕大伽藍の中に籠つて木魚に調子を合せて法華經行進曲位ひの調子でポクポク、ジャズ／＼やつて行くのが本望であり理想であると云ふなれば上求菩提、下化衆生の理想はどうなるのか？「私は坊さんだよ」とばかりに法衣と袈裟に吾身を包み社會から遠ざかつて如何にもお悟りを開いた様な御面相をしたからとて誰しも賞めもしないし、又けなさうもしなからう。私は時折、僧と云ふ文字を見つめる事がある、僧とは「曾つては人なり」と云ふ意味ではなかつただらう。私達

坊主はお母ちやんの胎内から法衣と袈裟に包まれてお出ましになつたわけでもなからう。

その昔、苦行林を出た沙門ゴータマも尼蓮禪河の畔に村の乙女より牛乳の供養を受けなかつたなれば彼の生命も風前の灯火であつたかも知れぬ。又日蓮聖人が北海の孤島佐渡の塚原配所に於て阿佛坊夫婦の給仕奉公が無かつたなれば大聖人の五体は白雪皚々たる塚原に朽ちたかも知れない。

現代の宗教家が大衆に向つて幾ら大きな口を叩いて説教講演に熱辯を振つて見ても彼等自身の脳裡には必らず彼等自身の生活問題が考究せられてゐるだらうと私は斷言して止まぬ。「不景氣が來ても坊さんは相變らず吞氣さうな顔をしてゐること」この言葉は私ばかりではない坊さんと名のつく人は必らず一般人からこの言葉を耳にすることだらう。

果して宗教家には、不景氣は馬耳念佛か知ら。若しも現代の宗教家の中に不景氣無干渉のお方があると云ふならば、それは人間には非らず坊さんにも非らず道傍の石地藏かも知れぬ。試みに佛教教團を見よ。僧の法施と衆生の財施とに依つて成立されてゐることが解る。現在日本の佛教寺院數七万一千三百二十九は誰の力に依つて存在して居るのか。又十四万三千九百二十人の僧侶は誰の爲に生計を立てゝ生活線戰に安定を得てゐるのか。

寺院生活の糧は檀信徒の汗と血の結晶がそれである。私達宗教家はもう少し社會生活の本体に觸れ

て見る必要は無からうか。現代の宗教家は余りにも社會生活そのものに對して無頓着ではないかしら。人間が母胎から投出されて人生行路の**第一**歩を踏み占めた時に三つの仕事が課せられてゐる事を私達は知らねばならぬ。夫れは自己保存と自己充實と自己延長とである。自己保存とは生命の保存方法を云ふ。人間は衣食住の生活を基本として行かねばならぬと云ふ事である。次に自己充實とは人格向上を云ふ。「人はパンなくして生きる事能はず、されど、人はパンのみにても生きる事能はず」「飽食暖衣逸居して教無き時は禽獸に近し」「朝に道を聞いて夕べに死すとも可なり」是等は何れも古人の言葉である。人間は決して三度の食事に座すばかりが能ではない。人間には文化がある。創造がある。理想がある——と思ふ。宇宙の生物界を二つに分けて人間界と動物界と呼ぶ事が出来るだらう。

人間と動物とは何處が違ふか知ら「人間は二本足、動物は四つ足だ、人間には尻尾がないが犬猿には尻尾がある」こんな問題はどうでもいい。もつと大切な所に差違がある。それは動物には理想がないが人間には理想がある。人間には文化生活があるが、動物にはそれが無い。此處に始めて人間と動物との差違が生じるのである。次に自己延長とは生物界は人間に依らず動物に依らず生殖作用と云ふものが行はれてゐる事は事實である。生殖作用の目的は彼等生物の同族の保存延長にあるのである。そしてこれは結婚制度に依つて行はれてゆく。斯くして吾等人類は是等の三大事業に依つて自己人格

を向上させ而して後人類社會をして共存共榮ならしめるのである。然らば宗教はこの三つの中何れに當てはまるべきものか、勿論第二の自己充實に必要なものである。世界人類が信奉歸依するいづれの宗教を見てもその目的が理想生活の向上に觸れてゐない宗教は一つもないと私は斷言する。總ての宗教は總ての人類に向つて人間生活の理想化を鼓吹してゐるだらう。

人生には理想と現實との二つがある。佛教的に言ふならば理想とは法的世界を指し現實とは人的世界を指す。又理想とは佛界であり現實とは九界である。しかるに現實を離れた理想も無ければ又理想を離れた現實もないのである。理想を離れた現實は墮落である。又現實を離れた理想は空想と云はねばなるまい。私達の兩眼は正しく理想向上を表現し、又兩足は現實世界の大地にしつかり踏み占めてゐるではないか。人間は眼ばかり利いても足が利かなければ歩く事は不可能だ。又足ばかり達者でも盲目であれば歩行は不可能である。而して生活線戦とは現實を指し宗教は理想を指すのである。しかれども人間生活を離れて宗教生活はなく又宗教より離れた人間生活は眞の生活とはいへないのである。

最近の日本思想を見るにアメリカからの弗の風、ロシアからの赤化の風に依つて我國にもトラスト文明シンヴェート文明とが輸入されつゝある。模倣上手の日本人は我先にと争つて是等の文明を取り入れた事であらう。「日本人位は物真似の上手な國民は世界に稀だ」と外國人は批評してゐる。丁度猿

が澁柿を喰つて赤い顔を更に赤くする様な具合に。そしてマルクス病患者は口々に唱へて「宗教は民衆の幻想的幸福である。宗教は民衆の阿片である」。又「宗教家はブルジョアの番犬なり」と叫んで一生懸命に宗教撲滅運動を始めてゐるではないか。

先日も大阪市中の失業労働者の群集が大阪の寺院に押し寄せて「俺達失業者のために寺院の伽藍を解放せよ」と迫つたさうだ。この注文には流石の坊さんも丸い頭をかかえて思案に余つたとの事だ。私の現在居る寺は東海道五十三次三嶋の宿であるが故に箱根の山をひかえてゐる。そして箱根の山を下つて来る失業者の群が、毎日平均二三人は寺の門を叩いて食物や金銭を要求して行くのである。だから東海道筋の寺院は毎日失業者に責められて苦しんでゐる状態である。

然るにお寺の和尚様はこの場合彼等に對して如何なる態度を取るべきか。この問題は相當に考へさせられる當面的の問題ではないか知ら、パンを與へるか、それともお定まりの説法で先づ門前拂ひを喰はせるか? 「君達は何故働かないのだ佛様は働く人には幸福を授けて下さるが遊んでゐる人には永久に幸福は來ないだらう。人間は働くために生れて來たのだ……」從來の坊さん風情なら屹度こんな具合に片附けて仕舞ふだらうが、これでは現代の宗教家の價值はないと云はねばなるまい。

「馬鹿坊主! 糞! 俺達はわざ／＼好き好んでブラ／＼してゐるんじゃない。この殺人的不景氣に當

てられて務め先きの工場が整理されてジビになつたのさ。貴様達は何の爲に法衣や袈裟をつけてゐるんだ。生きた人間を救ふのが本分か、死人を片附けるのが本分か——俺達は今日で二日も三日も食はず飲まずだ。どうかして呉れ」彼等は口外には出さぬが心中では私達宗教家に惡口を叩いてゐる事だらう。

宗教家は時と場合に依つて教化方法を替える必要がある。宗教の本質は不變であるが、教化手段と云ふものは時代に依り人により場所により變化が必要である。釋尊一代の說法の中にも大小權實の教理が布かれ、平等大慧の經典である法華經ですら本迹思想が論ぜられるのである。

生活線戰の激しい現代に於て宗教家は如何なる教法方針を取つて宗教宣傳に務めるべきかと云ふ問題は重大なる仕事ではなからうか。日蓮聖人が六百年の昔鎌倉時代の時代相に鑑みて、法華經をして時代的に宣布した事は私達門下の既に知れる事である。滅後六百五十年遠忌を迎へんとする今日に於て我等日蓮門下は、如何にして昭和時代に法華經を生かすべきかに就いて考へねばなるまい。宗教はその教化手段並びに方法を時代文化に照し合せて行かなかつたならば宗教的効果と云ふものは顯はれないであらう。

此處に於て現代の宗教家は三秘修行や五種修行も大切であらうが生活線戰の激しい現代に於ては、

生活線戰そのもの、本体を知り、而して後宗教的手段を講じて教化戰線に第一步を踏み出すのが今日
即ち昭和時代の宗教家としての當面の問題ではなからうか。

己上

(昭和五年八月卅一日脱稿)

隨感 凡身禮讚

貫名英雄

□鬼、佛はこれ凡身にあり、人多く自からを損して其の罪を天運に飯し、他を責めんとす、あやまれ
るかな。

□自己の進路をはぐむものは我なり、自己を墮落せしむるものも、亦我なり。思へ六國を亡ぼすもの
秦にあらざるを。

□世の人、惡魔我を惱ますといふ、惡魔の存在を知れりや、彼の隠れ屋を突きとめずして、徒らに、
此の言をなす、無意味なるかな。

□墮落、汚れの所在は何處ぞ、外より來る汚穢は穢とするに足らず、識るや、惡魔も汚れも、汝の内